



目次

1. 「学生参加型FD推進活動」取り組み報告
2. 他大学学生フォーラム参加報告
3. FDミニシンポジウム報告
4. 部局FD活動紹介
5. FDシンポジウム開催告知

「学生参加型FD推進活動」取り組み報告

FD推進部専任教員 安野舞子

本年度のFD推進部の活動方針として「学生参加型FD推進活動の設立」を重要テーマの一つと掲げ、そのための学生グループを組織化することは、本誌第12号でお知らせした通りである。また、未だ発足前ではあったが、「教育改善学生スタッフ」（通称「学生FDスタッフ」）として内定していた5名が、平成22年9月上旬に行われたFD合宿研修会に参加した報告も本誌前号で行なった。

本報告では、10月に正式に発足した学生FDスタッフの組織・「学生FDグループ」の設立までの経緯、発足式の模様、そして活動の様子と今後の展望についてお伝えする。

「学生FDスタッフ」の誕生と「学生FDグループ」の組織化

FD推進部会では、平成22年6月の会議において、当部会の指導助言のもと、本学の教育内容・方法の改善策の企画・立案、提言を行う学生による協力者を「学生FDスタッフ」とし（後に、正式名称は「教育改善学生スタッフ」とすることに決定）、各学部からの推薦および公募により人員を募ることを決めた。

推薦については、大学教育総合センター長およびFD推進部門長の連名で、各学部長宛に「学生FDスタッフ」推薦依頼書を送付し、各学部から2年生1名を含む2～4年生を2名選出いただく

ようお願いします。

一方、公募については、本学のホームページ、学内の掲示板、および教務課から学生への一斉メール配信を利用して応募を呼びかけた。応募対象は「本学の学部生および大学院生」とし、募集人数は8名程度とした。応募にあたっては、800字程度の小論文（テーマ：「カリキュラム、授業等において改善すべきだと思われる点、およびその改善案について」）の提出を課した（募集期間は7月8日～8月12日）。その結果、募集人数と同数の8名から応募があり、FD推進部教員3名で小論文に基づき選考した結果、8名全員を「学生FDスタッフ」として採用することにした。

最終的に、推薦、公募合わせて15名の「学生FDスタッフ」の採用が決まったが（内、学部生13名、大学院生2名）、この15名で結成される組織を「学生FDグループ」と称し、10月1日から発足することになった。なお、学生FDスタッフの任期は、次年度前期終了（平成23年9月30日）までの1年間である（ただし、平成23年4月に卒業及び修了する者は、それをもって任期満了となる）。

「学生FDグループ」発足式

学生FDグループの発足式は、9月30日（木）午前9時30分より、事務局5階会議室にて行われた。上野FD推進部門長からの「学生FDスタッフ趣旨説明」、高木センター長からの挨拶の後、鈴木学長から学生FDスタッフの代表に委嘱状が授与された。その後、挨拶をされた学長からは、「本学の教育改善のために積極的な意見を」との期待が寄せられた。最後に、学生FDスタッフを代表して、教育人間科学部2年の木村仁星^{にせい}さんが活動抱負を述べ、「大学に変えてもらおうという思いではなく、我々学生一人ひとりが意識をもち、大学をより良くしていこう」との意欲あふれる思いを語ってくれた。



発足式の様子（鈴木学長の挨拶）

「学生FDグループ」の活動と今後の展望

発足式に続き、同じ会場で「第1回FD推進部学生会・教職員合同会議」（以下、合同会議）を行った。この合同会議は、学生FDグループ、FD推進部教員、学務部教務課職員、その他FD推進部門長が指名した者から構成され、毎月1回、本学の教育内容・方法の改善に係わる学生FDグループからの企画・立案、提言やFD推進部会からの提案について審議することを目的としている。

第1回の合同会議では、まず初めに上野部門長より、発足式で代表として受け取った学生以外の全学生FDスタッフに委嘱状が授与され、続いて学生FDスタッフおよび関係教職員全員が自己紹介を行った。

この合同会議の特徴は、学生FDグループの代表および副代表が議長および副議長を務めることにある。これは、学生FDグループが主体的・能動的に本学の教育改善活動に係わることへの期待の表れといえる。そこで、第2回合同会議（10月21日）では、学生FDグループの中核となって活躍していく代表・副代表を自薦・他薦により選出した。その結果、発足式で代表抱負を述べた教育人間科学部2年の木村さんが学生FDグループ代表として、同じく教育人間科学部2年の今野綾香さんが副代表として選ばれた。以下に、代

表の木村さん、および副代表の今野さんの抱負コメントを紹介する。

代表・木村仁星さん：“大学教育の問題”を考える際に、一概に学生がその原因であるとして片付ける事はあまりに安直である。これは学内の環境、成長する為の機会、教員のあり方等、様々な問題が複雑に絡んでいるものであり、解決に向けて十分に吟味されなければならない。今後代表を務めるにあたって、こうした問題についてメンバーと一体となり、決して「一方向的」な改革とならないよう慎重に取り組んでいきたい。

副代表・今野綾香さん：授業改善について、学生FDスタッフとして活発に活動していきたいと思えます。他大学の実践例からも学びつつ、多角的な視点で現状を見つめ直し、より良い状況をつくり出していければ、と考えています。

無論、学生FDグループの活動は、月1回の合同会議への出席だけではない。今後、定期的に学生FDスタッフだけで集まり、様々な企画・立案を行っていくことになる。また、本年度は「学内重点化競争的経費」から学生FDグループの活動に対する予算を配分していただいているので、他大学での教育改善に関する学生交流イベント等に学生FDスタッフを積極的に派遣している(次

ページ以降では、こうしたイベントに参加した学生FDスタッフからの報告を掲載)。

更に、平成23年3月に開催予定の「FDシンポジウム」では、パネルディスカッションのパネリストとして学生FDスタッフに登壇してもらい、本学学生の意見を代表する報告をしていただく予定である。

日本の大学において「FD」が制度化され、様々な形で活動が展開されて久しいが、「学生参加(参画)型FD」はまだここ数年の動きである。しかし、この短い期間に、こうした動きは全国各地の大学に着実に広まっており、今後FD活動に学生が積極的に係わることが「当然」の流れとなることは想像に難くない。それは、既に10年前(平成12年6月)、文部省高等教育局(当時)が出した報告書(通称「廣中レポート」)の中で指摘されている点からも明らかである：「(大学の教育改革が)真に実効あるものとなるためには、教育を提供する立場の論理だけではなく、学習する側である学生の立場に立ったものとして進められる必要がある。」

本学での「学生参加型FD」の取り組みは始まったばかりである。今後、紆余曲折あると思うが、縁あって学生FDグループの一員となったスタッフのお一人お一人、そして関係教職員と共に、本学における教育改革の新たな歴史を築いて参りたい。



発足式での記念撮影

法政大学FDフォーラム（サマーフェスタ）参加報告

学生FDグループ副代表／教育人間科学部 2年 今野綾香

FDフォーラムの位置づけ

平成22年8月27日（金）、『大学での「授業」の活性化とは!!』をテーマに、法政大学第5回FDフォーラム（サマーフェスタ）が同大学市ヶ谷キャンパス外濠校舎にて開催されました。これは、「HART*コミュニティー」—H（法政大学）、A（青山学院大学）、R（立教大学）、T（東洋大学）とのFD連携—によるもので、学生が主体的にこのフォーラムの準備にあたりました。

このフォーラムは、教職員や学生の大学間交流を通して、大学の「授業改善」や「キャンパスライフ」について考える「学び場」として位置づけられていました。テーマにある『「授業」の活性化』を中心として、参加者が考えさせられる内容となっており、検討する良い機会になったように思います。



HART*コミュニティースタッフの皆さん

2009年度学生の声コンクール受賞作品紹介

FDフォーラムは「学生の声」紹介から始まりました。2009年度は、「私が選んだ、ちょっとイイ授業」をテーマに、“これまで受けた授業で、先生のこんな工夫がよかった、こんなことが面白かった、うれしかった、ためになった、また受講

開催日時：平成22年8月27日（金）

午後1時00分～4時20分

開催場所：法政大学市ヶ谷キャンパス

外濠校舎3階S305教室

参加人数：全国20大学より約100人

プログラム：

・開会の挨拶

…川上忠重 氏／法政FD推進センター長

[第1部第5回FDフォーラム]

・2009年度学生の声コンクール受賞作品紹介

・基調講演

『大学での「授業」の活性化とは!!』

…杉原真晃 氏／山形大学基盤教育院准教授

[第2部FDサマーフェスタ]

・FDサマーフェスタ開会挨拶

およびスタッフ紹介

・FDサマーフェスタイベント

1) 奇術愛好会

2) 落語研究会

・学生FDサミット2011春 紹介

およびスタッフ募集案内

・閉会の挨拶

…徳安彰 氏／常務理事・法政大学教授

生の中でこんな取り組みをしてよかった”等の経験談を募集したそうです。今回は、その中からコンクール受賞作品を紹介するものでした。気持ちが詰まって強く訴えかけるような作品が多く、私自身の経験と重ね合わせて共感できる作品もあり、どれも印象的な作品ばかりでした。授業を受けている学生が実際にどんなことを感じ考えているのかを教職員にフィードバックする方法としては、このような方法もあることを初めて知り、

とても興味深く思いました。選択式のものとは違い、学生自身の言葉で語れる点で、学生のより率直な感想・考えを引き出すことができる可能性もあるのではないかと感じました。



アナウンス研究会による「学生の声」紹介

基調講演『大学での「授業」の活性化とは！！』（杉原真晃 氏／山形大学基盤教育院・高等教育研究企画センター准教授）

第1部のメインでもある、杉原准教授の基調講演は、参加者の多くがひきつけられるようにして聴いていました。はじめに“「活性化されていない」授業”を踏まえた上で、“「活性化している」授業”とはどのようなものなのか考えられる例を示してくださいました。杉原准教授のお話は、具体例が多く盛り込まれており、聴いていてイメージがしやすく、わかりやすいものでした。途中動画で示してくださいました「あっとおどろく大学授業NG集」では、私自身の経験と重ね合わせてみても、覚えがあったり共感できるものも取り上げられており、改めて問題点が見え、考えさせられました。

また講演後半では、杉原准教授が実際に取り組んでいる事例を取り上げ、実践例として、“どのように「授業」を「活性化」させるか”の例を紹介してくださいました。この講演で感じたことをもとに、さらに「授業改善」について考えを深め、検討していきたいです。



山形大学の杉原准教授による基調講演

FDサマーフェスティバル

第2部のFDサマーフェスティバルでは、法政大学の学生団体である、奇術愛好会と落語研究会がそれぞれ活動を紹介し、参加者を盛り上げようと練習の成果を披露してくださいました。この企画自体、おもしろく新しい発想だと感じました。会場も和やかな雰囲気となり、とても楽しむことができたように思います。



マジックを披露する奇術愛好会

法政大学FDフォーラムに参加して

このFDフォーラムに参加したことにより、特に「授業改善」について、どのような問題点があるのかが少し見えてきたように思います。また、杉原准教授の講演にあった改善例等も参考にし、検討を進め考えを深めていかなければならないと感じました。この場で感じたこと、学んだことを、その場限りにしてしまうことなく、今後の私たち学生FDスタッフの活動に生かしていきたいと考えております。

学生FDサミット・2010夏 参加報告

学生FDグループ代表／教育人間科学部 2年 木村仁星

イベント概要

平成22年8月28日(土)及び29日(日)、全国各地の諸大学の教員・学生約200名が、各大学FD推進団体における連携の促進、及びFDに対するより深い理解・着眼点を獲得するという目的のもと、立命館大学衣笠キャンパスで行われた学生FDサミットに参加した。サミットは主に学生が主体となり、教員がそれを補助する形で進められた。以下では、そのうちの核心部分であるイベント内容を2点採り上げた。

活動報告

サミット初日には、一部の参加大学から活動内容の報告がプレゼンテーションで行われた。報告内容として、大学内の教育における問題を取り上げ、それに対して具体的にどのような施策を行っているか、学内でのFDの位置づけがどのように重要視されているか等が提起された。



一日目の活動内容報告を真剣に聞く参加学生・教員

グループディスカッション

サミット二日目に行われたグループディスカッションは、現行の教育における問題に関連したいくつかの異なるテーマが与えられ、個々がそれ

らのテーマの中から一つ興味のあるものを個別に選択した。その後、教員・学生が少人数(例として8名、うち学生6名教員2名)のチーム毎に分けられ、チーム毎にディスカッションを約3時間に渡って行い、最終的にプレゼンテーションとして発表するという内容だった。

ディスカッション開始後まもなくは互いに遠慮し合い、中々議論が進まなかったものの、打ち解けてくると共に、徐々に洗練された意見が出てくる様子が確認できた。最終的に行われたプレゼンテーションでは、それぞれが実に良い着眼点から考察されていて、熱のこもった議論の跡が窺えた。しかし、概観として、プレゼン内容は固まっていたものの内容を深く掘り下げて質問に対する準備を万全に行う段階にまでは至らなかった様子を見ると、今回のディスカッションの時間は些か短かったように思われる。ただ、この問題についてはイベント担当者もよく理解しており、次回のサミットではもう少しじっくりとプレゼン内容を煮詰めて行く時間を用意したい、という思いを語っていた。



二日目のプレゼン終了後の一グループの集合写真

まとめ

このように全国のFD推進団体が一つの場所に集結し、教育について真剣に考えるという大規模な機会は、中々無い。またそうした現状も伴い、今回のサミットは、様々な学外の人々の意見を耳にする事のできる貴重な機会であったと言える。

また、今回は関東圏・関西圏が一体となる事で様々な点における両者の違いについても改めて認識する事が出来たが、具体的な違いについて以下に2点記載した。

意識の違い

まず始めに挙げられるのが、関東圏の大学と比較して、関西圏の大学のFD活動に対する熱意が強い事である。主な判断理由としては、今回のサミットを通して関西圏の諸大学のFD活動に対しての積極性、具体性が関東圏の大学に比べて色濃く浮き出ている事、また積極的に意見を提示する姿勢である。

関西圏の教員・学生と交流を深める上で何故熱意が強いのかを検討した所、「大学愛」という言葉が浮かんだ。関東圏で意識の高い学生が大学自体に依存せずに、個々で動く過程で大学の環境を良くしていければ、という意識が強い意味で「大学愛」が比較的薄い反面、関西圏で意識の高い学生は、大学との深い繋がりを求め、大学を良くして行こうという目的の元で様々な活動に取り組んでいる意味で「大学愛」が比較的強い事がわかった。

インターネット媒体の利用者

普段中々関係を持つ事の出来ない人々と知り合ったという事もあり、今後もこの繋がりを維持し、情報交換をし続けたいという理由で連絡先を交換する学生・教員が多く見受けられた。

ところが、いざ連絡手段としてTwitter等のインターネット媒体を挙げると途端に困惑してしまう関西圏の学生が非常に多かった。

関東圏の学生はTwitterを情報発信・受信の手段として積極的に使う反面、どうやら関西圏の学生にはあまりTwitterが普及していない事がわかった。また、Skype等インターネット上通話機能のインターフェースについても混乱してしまう学生が多く見受けられた。

この問題についても、後日関西の学生数名と話をする機会があったが、どうやら関西の学生は内側での結びつきが強い事がわかった。今後、輪を広げて関西圏・関東圏、相互の情報交換を行う上で、共通のプラットフォームの必要性を再確認するに至った。

一日目

10:00-10:30	受付
10:30-12:00	オープニング
12:00-13:00	昼休憩
13:00-14:35	サミット交流タイム
14:50-15:20	学生FDサミット・2010夏 「はじめに」
15:25-17:05	しゃべり場「大学の教育の意義」 (学生・教員合同)
17:10-17:15	一日目のまとめと二日目の連絡
17:30-19:00	懇親会

二日目

9:30-10:00	受付
10:00-11:00	学生FD取組み紹介
11:00-13:50	グループワーク
14:10-15:40	グループワーク発表
15:40-16:00	エンディング・全体集合写真

FDミニシンポジウム ー環境情報研究院での試みー

環境情報研究院 岡 泰資

はじめに

大学教育センターFD推進部は、毎年、全学の教員を対象にFDシンポジウムを開催してきた。しかし、FD推進の方法が部局毎に異なることから、新たな試みとして、各部局の方針に沿ったFDミニシンポジウムを開催することになった。ここでは、平成22年11月15日に環境情報研究院で開催されたFDミニシンポジウムの概要について報告する。

FDミニシンポジウムは、環境情報1号棟501室において教授会開催前の14時から30分間の予定で、環境情報学府での教育・研究に従事する教員に対して開催された。写真1に示したように、本ミニシンポジウムはFD推進部部門長の上野教授から「観点別到達目標を踏まえたシラバスづくり」と題した講演、ワークショップ、質疑応答の内容で行われた。



写真1 シンポジウムでの講演の様子

FDミニシンポジウムの内容

講演は、(a)到達目標は何故必要か、(b)到達目標を書いてみよう、(c)到達目標から得られるもの、の内容で進められた。

(a)到達目標は何故必要か

図1に示したように大学は質の保証と情報公開が求められていることが強調され、本ミニシンポジウムではカリキュラム・ポリシーに関連した、教育体制がどのようになっているか、その中身がどのように保証されているかを明示したカリキュラムツリーや授業設計を中心に説明された。

質保証……目標の策定と実行の評価

3つのポリシー

- ◆ ディプロマ・ポリシー
卒業認定・学位授与に関する基本的方針
- ◆ カリキュラム・ポリシー
教育の実施に関する基本的方針
- ◆ アドミッション・ポリシー
学生募集の方針と入学者選抜の方法

情報公開……教育内容の公開

図1 大学に求められていること

特にシラバスには、(1)授業の目的、(2)授業の方法、内容(15コマ分)および開講期間中での計画、(3)客観性および厳格性を確保するための成績の判定基準(到達目標と一般目標の明示)を記述することが強調された。結局は、担当する講義がカバーする領域を明確に記載すると云うことになる。

(b)到達目標を書いてみよう

図2に示したように、シラバスは観点別到達目標を意識して作成することが重要であり、(1)認知的領域では知識を得ているか、(2)情意的領域では関心や意欲を持っているか、(3)精神運動的領域では知識を有効に使えるかが、それぞれのポイントであることが説明された。

	目標	例文(JABEE)
認知的領域 (Cognitive Domain)	知識理解判断	数学、自然科学及び情報技術に関する十分な知識を持ち、それらを応用することができる
情意的領域 (Affective Domain)	関心意欲態度	技術が社会や自然に及ぼす影響や効果を説明でき、技術者が社会に対して負っている責任を感じる
精神運動的領域 (Psychomotor Domain)	技能表現	種々の科学、技術及び情報を利用して、社会の要求を解決するために創造し、表現することができる

図2 観点別到達目標

さらに観点別到達目標作成の留意点として、

- (1) 15 コマの講義終了後にできるようになってもらいたいことを、学習者が主語で「○○できる」という形式で書く
- (2) 「理解する」などの概念的な言葉でなく、図3に示した観点別の「行為動詞」を用いて、できるだけ観察可能な行動で表現する
- (3) 観点別に、できるだけ単文で表現すると主語は学習者であり、決して教員ではないことを認識すべきであることが強調された。

認知的領域： 列挙する 説明する 分類する 評価する 予測する 批判する 使用する 比較する 公式化する 例を挙げる
情意的領域： 討議する 態度を示す 感情を表現する 参加する 反応する 協力する 相談する 受容する 助ける
精神運動領域： 模倣する 工夫する 実施する 創造する 調べる 測定する 修理する 運転する 話す 書く 削る 切る

図3 行為動詞の例

(c)到達目標から得られるもの

シラバスに記載された到達目標は、教員側からは、成績の基準や教育目標の役割を果たし、学生側からは、履修判断への補助や学習の方向付けが明確となる。また本学で実施している授業アンケートの結果を担当者に戻すことで、講義内容および方法の改善を図るためのPDCAサイクルをまわすことが可能となる。

ワークショップ

ワークショップでは、「イタリア料理の奥深さを理解し、パスタを作らせる」という文章を、観点別到達目標を踏まえて書き直せという課題が出された。

本ミニシンポジウムに参加された方々も、はじめはとまどいながら隣の方と話し始めましたが、前後に座っていた他のグループ間でも意見交換が行われるようになり、楽しみながら課題に取り組んでいました。

この課題では知識と行動に分けることがポイントであると以下のように説明された。

まず知識として、

「イタリア料理の歴史や特徴を説明することができる」

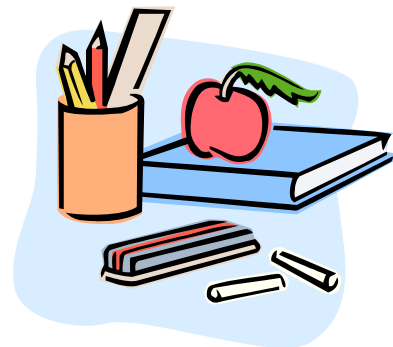
次に行動として、

「授業で扱う代表的なパスタを、教科書を見ながらつくることができる」

ただし教科書は最低限の到達ラインの位置づけとなり、また、「おいしいパスタ」は一般目標に位置づけられ、「優」に相当する。

筆者は以下のように書き直しました。さてさて採点結果はどうなりますでしょうか？

「イタリア料理の奥深さを調査し、パスタの味見しながら作成し、第三者に試食頂き感想を聞く。」



部局FD活動紹介（留学生センターのFD—国際化の視点から—）

留学生センター 小川誉子美

留学生センターでは、本年度も、休暇中の特別クラスや種々の行事を通じ、留學生活の充実をめざしたサービスを行っております。今回は、大学教育の国際化をテーマに、若干の提案と活動紹介をします。

「白熱授業」と教室英語

留学生センター教授（元共同通信記者）

宮武久佳

「1枚取って次の人に回してください」「プリントがない人はいませんか」*（注）

仮にあなたが、英語による授業を担当していたとします。英語でこれを何て言いますか。

私は米国の大学に2度の留学経験がありますが、米国で教壇に立ったことはありません。その私が現在、留学生相手に「国際交流科目（JOY）」を担当しています。全てを英語で通しています。日本語で話しかけられても英語で返すことにしています。

しかし、英語に自信があるわけではありません。もしも教師が教室で学生や生徒に向かって話す決まり切った英語を「教室英語」と呼ぶなら、私の教室英語は「我流」というか「無手勝流」です。カジュアルですが、100%通じます。学生の言うことも何とかなる。その証拠に、学生は私の質問に答えるし、課題も指示通りやってくる。だから教室英語と聞くと、「んな、通じればいいじゃん」と言いたくなります。

でも、本音は違います。本当はきちんとした教室英語を話したい。

ハーバード大学マイケル・サンデル教授の「白熱教室」をTVで見ました。品格があつて恰好いいですね。学生さばきも洗練されている。私とサンデル教授の共通点は、大きな教室を動きまわることぐらいです。

よく見ていると、教授は教室英語を多用していることに気づきます。「君の名前は?」「彼の主張とあなたの考えはどこが違う?」「ではビデオを見てみよう」「その質問には後で答えよう」



《筆者による授業風景。タシケント（ウズベキスタン）で》

いずれも何てことのないセリフです。日常の言葉がそのまま使えそうです。しかし授業風景が世界に放送されるとなれば、日常のくだけた言い方ばかりではまずいでしょう。最低限の教室英語を使用したい。もちろん、誰もがサンデル教授である必要はありません。それにハーバードでも非英語圏の教員がいますから、実際はカジュアル英語による授業も多いでしょう。否、無手勝流の英語は案外、世界中の大学で幅をきかせていそうです。

とはいえ、DVDで授業が簡単に収録される時代に、無手勝流の英語で押し通すのもどうかと思います。大学という大人社会では最低限の品格や威厳も必要ではないでしょうか。正しい教室英語

* 注：英語では次のように言う（らしい）。“Take one and pass them on.” “Is there anybody without a copy?” 《「大学教員のための教室英語表現300」（中井俊樹編、アルク社）より》

を知った上で、自分のスタイルを持ちたいです。

日本の各大学で「英語による授業」が増えてきました。いろんな教員に「英語で授業やってよ」という圧力がかかり始めています。しかし、海外経験が豊富で、かなり英語が上手な教員でも、授業となると「私の英語ではとても」と二の足を踏んでいます。皆が皆、私のように厚顔無恥ではないのだから無理ありません。

「英語による授業」を担当するには、相応の教員研修（FD）が必要であると痛感します。FDがあるなら、私、真っ先に登録します。



《授業後に撮影した。左から3人目が筆者》

留学生と世界の平和を

留学生センター准教授 奥野由紀子

平成22年10月30日（土）ホームカミングデーの留学生センター企画において、今年度の新しい開講科目「日本語演習：平和について日本語で語ろう」の一部公開を行いました。グエン・ウィン・チャムさん（ベトナム・経済2年）による発表「貧困と平和」の後、多様なフロア参加者（本学OB、留学生、日本人学生、地域ボランティア、理事、教員）がグループに分かれ、活発なディスカッションがなされました。

発表者のチャムさんはこの授業をきっかけに、大学の外へも飛び出し、かめのり財団による将来のアジアのリーダーを育成するための「かめのり

地球青少年サミット ジャパン 2010」に応募・参加し、プレゼンテーションで見事3位入賞を果たしています。

様々な地域から集まる身近な留学生と一緒に、世界の平和について語ってみませんか。



《チャムさんの発表》



《発表後のグループディスカッション》

派遣留学推進のための授業

留学生センター教授 吉田昌平

YNU生にとって、圧倒的に人気のある留学先は北米であり、他の英語国がこれに続き、その次の人気地域が西欧です。アジア・アフリカは、受入留学生は大勢にいるにもかかわらず、本学学生の留学先としては不人気で、「他地域に興味はあっても一生に一度の留学は、やっぱりアメリカへ」というのがYNU生の本音のようです。アジア・アフリカでも特にアラブ・イスラーム地域は不人気で、このままでは協定校であるエジプトのカイ

ロ大学にも、近い将来協定校となるマレーシアのマラヤ大学、ブルネイのブルネイ大学ともバランスのとれた学生交流ができなくなってしまう。

アラブ・イスラーム地域の面白さと重要性をYNU生に伝えて、YNU生のアラブ・イスラーム地域留学への興味を育むことを目的として、本学短期留学コーディネーターとして、教養教育科目「実践アラブ・イスラーム入門」を急遽開講しました。スモールグループ討議／活動やシミュレーションゲームを取り入れ、アラビア語・アラビア文字・イスラームの習慣・メディアリテラシー・マレー語・アラブ文学／音楽について、本が

教えてくれない実践的知識と技能の習得を重視した授業を行なっています。



《「実践アラブ・イスラーム入門」授業風景》

部局FD活動紹介（国際社会科学研究科）

国際社会科学研究科 根本洋一

国際社会科学研究科は博士課程前期、同後期および専門職学位課程から構成されており、いずれも経済学・経営学・法学の専攻に分かれている。私は法律系（博士課程前期の国際関係法専攻と専門職学位課程の法曹実務専攻）の教育研究高度化委員であるので、以下では法律系のFD活動に関して報告する。

国際社会科学研究科の法曹実務専攻は専門職大学院設置基準という法科大学院であるため、平成16年の法曹実務専攻の設置以来法律系では教育研究高度化委員会を設置してFD活動に力を入れて来た。すなわち、法曹実務専攻と国際関係法専攻では、教員は両専攻の授業科目を担当しており、また、一方の専攻の学生は他方の専攻の授業科目を履修することができるので、教育研究高度化委員会はFD活動を基本的には両専攻に共通した形で行っている。本年度のFD活動は以下の通りである。

授業評価アンケート

授業評価アンケートは国際関係法専攻と法曹実務専攻の全授業科目を対象として毎年実施しており、各学期に中間アンケートと学期末アンケートを実施している。いずれも2週間の期間内の授業開始時または終了時に実施し、記入者名は匿名とし、教員の指名した学生が授業終了後にアンケート回答を集めて事務室に届ける方法をとっている。

まず、中間アンケート（授業開始後7週目から8週目にかけて実施）は記述式であり、授業内容、授業の進め方、教員の授業態度などに関して自由記載方式で実施している。教員はアンケート回答を読み、「受講生への返信（授業改善計画書）」を事務室に提出する。この「受講生への返信（授業改善計画書）」は法律系の全教員および学生の閲覧に供される。また、アンケート回答は授業科目名を伏せて一覧表にまとめ、法律系の全教員およ

び学生の閲覧に供される。

学期の中間にアンケートを実施するのは、教員が学生の意見を受けて授業の改善に役立てることができるようにするためである。

次に、学期末アンケート（学期末試験期間直前の2週間の期間中に実施）はマークシート方式であり、授業内容、授業の進め方、教員の授業態度などを学生が5段階で評価するものである。アンケート回答は授業科目ごとにグラフ形式にまとめて担当教員に通知される。

公開授業

公開授業も法律系で毎年実施しているFD活動である。前学期と後学期のいずれも10週目ごろに2週間の期間をとり、この期間中は法律系のすべての教員（専任、客員、非常勤）が法律系（国際関係法専攻、法曹実務専攻）で開講されているなどの授業科目も参観できることとしている。この制度により、各教員がよい授業を参観して自己の授業の改善に役立てることが期待されている。

修了生との懇談会

法曹実務専攻では新司法試験合格者などと教員との懇談会を毎年開き、修了生などから率直な意見を聴取して授業などの改善に役立てている。

まず、「新司法試験合格者との懇談会」は新司法試験合格者と法律系教員との懇談会であり、毎年、新司法試験の合格発表（9月上旬～中旬）後に開催している。今年度も合格者から授業内容、授業方法、施設などに関して忌憚のない意見を聴取した。

次に、「新司法試験未合格者との懇談会」は、修了生でまだ新司法試験に合格していないものと教員との懇談会である。今年度は法律系の教員全員に案内を出して新司法試験合格発表後に実施し、未合格者が置かれている状況や大学に対してどんな支援策を期待しているのかについて意見交換をした。

法曹実務専攻学習支援プロジェクトチームの活動

今年度はFD活動をより充実させるために新司法試験合格発表後に「法曹実務専攻学習支援プロジェクトチーム」（以下、「プロジェクトチーム」という）を設置した。上記の懇談会（合格者との懇談会、未合格者との懇談会）は実質的にはプロジェクトチームと教育研究高度化委員会とで実施したものである。

プロジェクトチームでは、新司法試験の合格発表後に、法曹実務専攻の在學生と修了生（合格者、未合格者、進路変更者）を対象として大規模なアンケートを実施した。質問項目は、授業内容、授業方法、施設など多岐にわたった。アンケート回答を受けて、オフィスアワー（在學生と教員との面会制度）の実施方法およびアカデミックアドバイsteam（複数教員によるクラス担任の制度）の運用方法を改善することとした。これ以外にも、アンケート結果を受けて教育研究高度化委員会で教育方法の改善策を検討する予定である。

プロジェクトチームでは、法曹実務専攻の修了生全員を対象として、入試成績・授業科目成績・新司法試験合格否の関係を調査した。この調査結果を受けて入試委員会で法曹実務専攻の入試の改善について検討することとした。

FD推進部会主催の公開授業

FD推進部会実施の公開授業として前学期には「刑事模擬裁判」（9月7日（火）～9日（木）、高原將光教授、藤原光秀教授、高橋健一郎教授）の公開授業を実施し、後学期には「民法演習Ⅱ」（12月21日（火）、高橋寿一教授）の公開授業を実施した。

おわりに

以上のように、国際社会科学研究所の法律系のFD活動は非常に充実しており、教員も授業その他の教育方法の改善に日々熱心に取り組んでいるといえよう。

公開授業報告（教育人間科学部「絵画実技Ⅲ、Ⅳ」）

教育人間科学部 赤木範陸

2期の公開授業

昨年度まで公開授業は後期にのみ開講されていたが、今年度より前期と後期の2期に渡って開講されるようになった事は周知の事実だろう。これは前期のみの開講では公開授業に参加する機会がすくなくすぎるのではないかとの配慮からであるが、機会は増えても公開授業自体の開講期間が長ければ、その分やはり参加者の気持ちも弛緩するのではないかとの懸念もあって後期の公開授業は約一ヶ月ほどの予定で開講され、当初の成果を得たと考えている。

美術授業の特質と公開の問題点

教育人間科学部ではベストティーチャー賞を受賞した若手の2名の先生にお願いすることとしたが、その2名が在外研修ということもあって、2名の先生方の授業は後期と次年度に延期する事とし、今回は私がその任を担う事となった。私の授業に於いては実技という事もあって、公開



授業風景

のタイミングが難しく、公開の時期設定をいくらか慎重にしなければならなかった。つまり授業自

体が講義形式でないためいつどの授業でも公開しても一応は理解してもらえるとという授業にはなっていない。一般の講義がどこでも見て頂いて結構ですよ、とっているのではないが、授業時間を学生個人の実技レベルと理解度に合わせて一人一人に指導しなければならない実技系の授業はそのあり方からして講義とは異なっている。学生が制作しているもに行っていたら部分部分を丁寧に指導する授業は後ろから見ていただけでは何をいっているのか聞き取れないだろう。指導内容も傍目からは分からないだろうし、ただ雑然とした中での授業は授業に見えないかもしれない。しかしながら、美術の授業と云うものは数世紀も前の時代からこのようにして次の世代に大切な技術を受け渡してきたのであって、ヨーロッパのアカデミーでも多くの画家や優れた教師たちを排出して来た経緯を重んじるならばこれこそが美術の授業であって、ここに鑑賞者として参加するならば多くの意味が汲み取れるに違いないし、本当に知ってもらいたい部分もそこに尽きると私は考えている。とはいえこれらの事をいちいち参加者に説明する訳にもいかず、黙っていても参加者がそれを理解し深く納得してもらえるとと思っている訳でもない。

理解してもらう為には理解してもらえようなお膳立てが必要なのである。あれこれと思案したが、この公開授業では結局、授業期間中に行われる講評会の授業風景を設定した。実技の授業に於いては通常二度ほどの講評会を設けてあり、1授業間をかけて個人ごとに講評を行う。講評会に

先立って学生はまず作品を完成させなければならぬが授業時間だけでは時間が足りず作品は



個人に於ける講評会

完成しきれないため学生は空いた時間をその制作に当てる事となるが、これは単位取得の為の家庭学習に相当する。他の課題と違い家庭に持ち帰る事が困難であるためである。だが、この時間が学生にとって有益なものになっている。この辺り

が講義とは大きく異なる点であると考えている。講評会では学生一人一人が自分の作品に対して全体の前でプレゼンテーションを行う。授業参加者は、出来の善し悪しだけでなく、作者としての学生側の意識と理解度が見てとれるだろうし、このような学生の積極的な参加は少人数で、自己主張が出来る美術の特質であると分かるだろう。また通常の試験にもあたる作品を全体の前でさらけ出して講評するという行為は、制作の時点から人の作品の良いところを盗んで自分のものにする、というカンニングありきの授業の延長線であってその中でしか自分の感性を比較し、育む事が出来ないという美術の授業の面白さではないかと思うし、また授業参加者に知ってもらいたいところでもある。

このように美術の絵画に限らず他の実技系の授業には多くの示唆があって、参加者の視点を変える意外性が潜んでいると思っている。



絵画授業全体講評会風景

FDシンポジウム

「高校生を大学生へと育てる ー初年次教育ー」(仮)

開催日時： 平成 23 年 3 月 1 日 (火) 13 : 00 - 17 : 00

開催場所： 教育文化ホール 大集会室 (予定)

学生の質が変わったと感じられている方は多いと思います。しかし、それに合わせて授業方法を改善している方は多くないようです。今年度のFDシンポジウムは、入学してきた学生達に大学で学ぶスタイルを教える「初年次教育」に焦点を当て、学生の立場から教育のあり方を考える場を提供いたします。今年度に発足した教育改善学生スタッフもディスカッションに参加します。多くの方のご参加をお願いいたします。

第1部 高校教諭による高校の実態の講演

最近の高校生の意識変化や高校生の持つ大学への期待を高校の内部から紹介できる講師を招き、大学教員の持つイメージとの差を明らかにする。

第2部 予備校講師による現実社会の講演

現在の大学教育と社会の変化との関係を大学の周辺から評論できる講師の問題提起で、大学教育が社会に担う責任や将来の方向性を考える。

第3部 大学教員・学生ほかによるディスカッション

本学における初年次教育の実例や学生の持つ大学教育への期待を紹介し、フロアからも意見を含めて大学教育の改善に向けて議論する。

ご意見・ご感想がありましたら、下記宛までお寄せください。

YNU FDニュースレター No. 14

編集／横浜国立大学 大学教育総合センターFD推進部

作成担当：ニュースレター・ワーキンググループ

事務担当：教務課大学教育係

問合せ先：kyomu.kyoiku@ynu.ac.jp

発行／平成23年1月